

V 発掘の成果と提起する諸問題

1 まま上遺跡出土土器群の構造的分析

今回の調査は、1600m²と対象面積が比較的狭いにもかかわらず、縄文時代の住居跡5軒、集石土壇11基、埋甕1基、土壇104基、中・近世の掘立柱建物跡8棟、住居跡状堅穴遺構1軒、多数のピット状遺構が発見される等、多くの成果を得ることができた。

特に、縄文時代の第5号住居跡からは、中期中葉の勝坂式から後葉の加曽利E式への移行期の良好な土器群が出土している。ここでは、第5号住居跡出土の一括遺物を多面的に分析し、勝坂式から加曽利E式への変遷を構造的に検討してみたいと思う。

まま上遺跡の所在する毛呂山町は、武蔵野台地の西縁部に位置し、西は多摩及び甲斐地方と、東は大宮台地を含む東関東と情報交流的に近い位置関係にある。本遺跡出土の土器群にも、上記の他系統の要素が垣間見られ、通常に認識されている加曽利EⅠ式初頭期の様相と異なることが指摘される。ここでは、出土土器群を文様分帯、文様構成の単位、その系統性等の多面的な分析を通して、勝坂式的構成から加曽利E式的構成への変換期における接触及び融合形態を構造的に分析してみたい。

(1) 文様構成の単位論的把握

縄文土器の文様は、文様描出要素、施文順位、施文手法、文様帯の分帯・分割線と単位構成、施文具形態文様・方位形態文様（稲田1972）、装飾性文様と物語性文様（小林1986）等の概念で様々なレベルにおいて分析されてきた。近年では、文様の単位のみならず、割付手法の復元を試みた論考（小林2000）が発表されるなど、まさに、多方面、多角度からの分析が行われている。この場では、これ等様々な検討項目を満たすまでの分析は不可能であるが、一括出土した土器群の文様構成を単位的に把握し、土器文様の構造的原理を紐解いてみることを第一義的として分析を試みることにする。ここで中心的に取り扱う第5c号住居跡出土

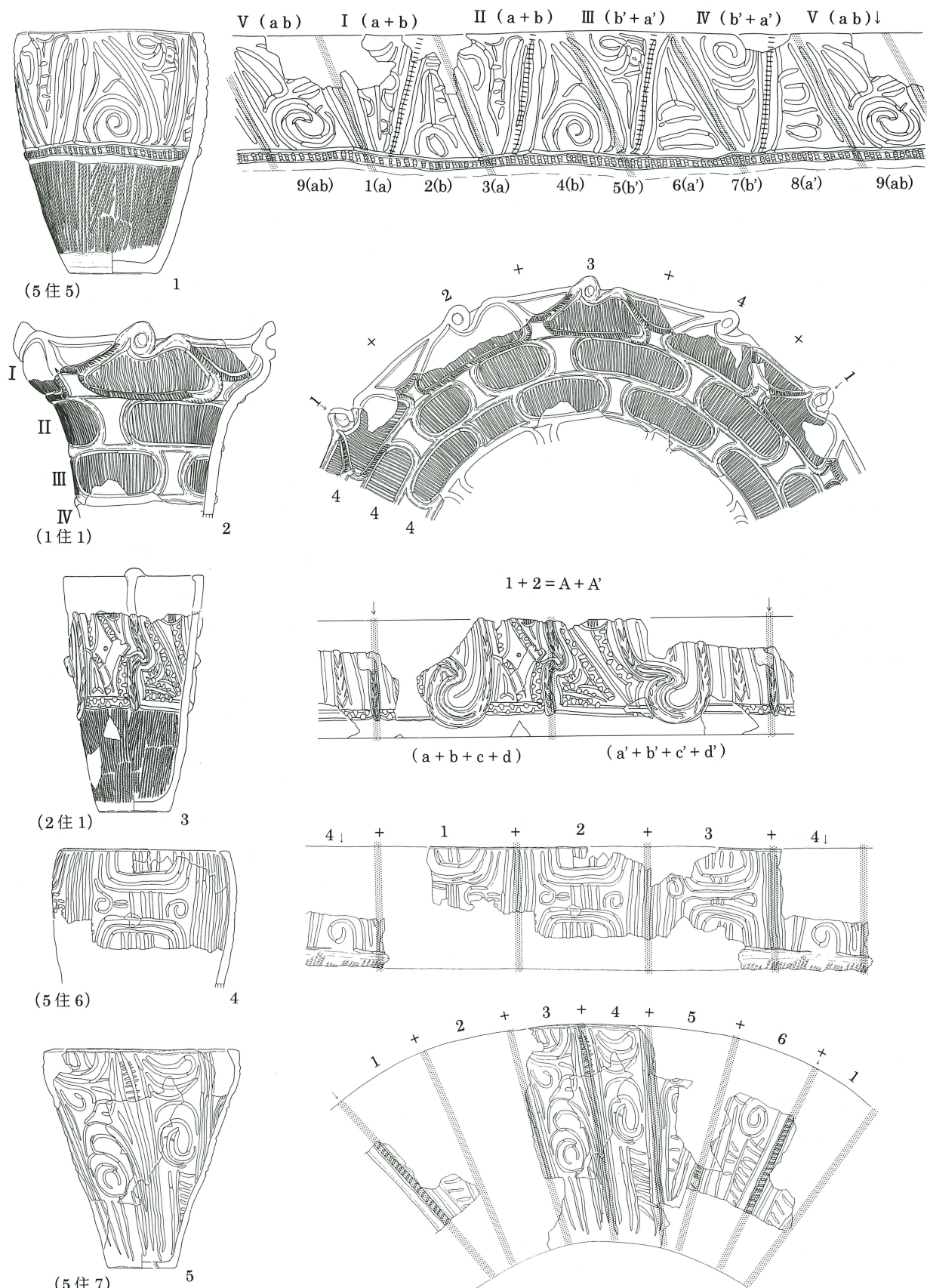
土器は、考古学的手法で廃棄時の一括性がほぼ保証されている土器群であり、所謂勝坂系と加曽利E系の土器群が相伴している資料である。この両者の文様構成を構造的に比較検討することによって、両者の型式学的な同時性と、構成原理の融合性を検討することを主眼にしたい。

第1図1～5に示したものは勝坂式系土器群、第2図6～7に示したものは加曽利E式系の土器群である。これ等の土器群の中で、2、3以外のものは第5c号住居跡の一括出土である。

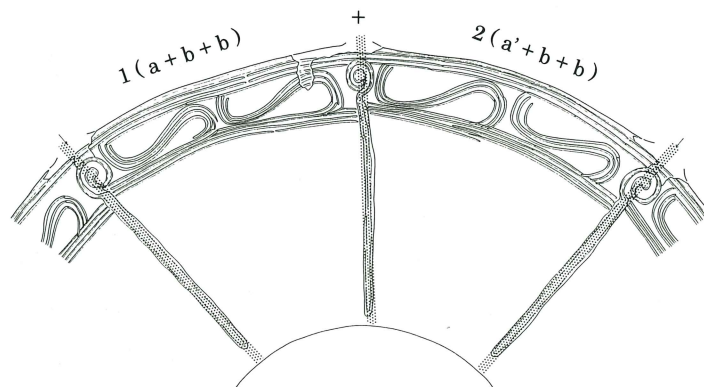
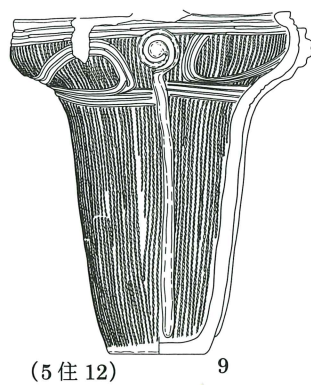
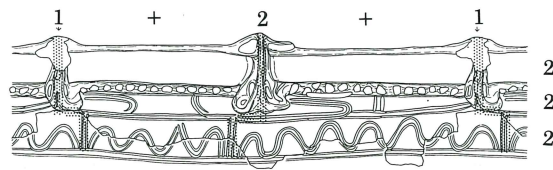
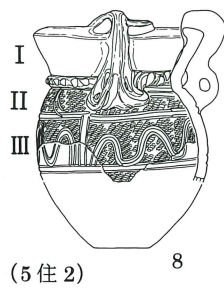
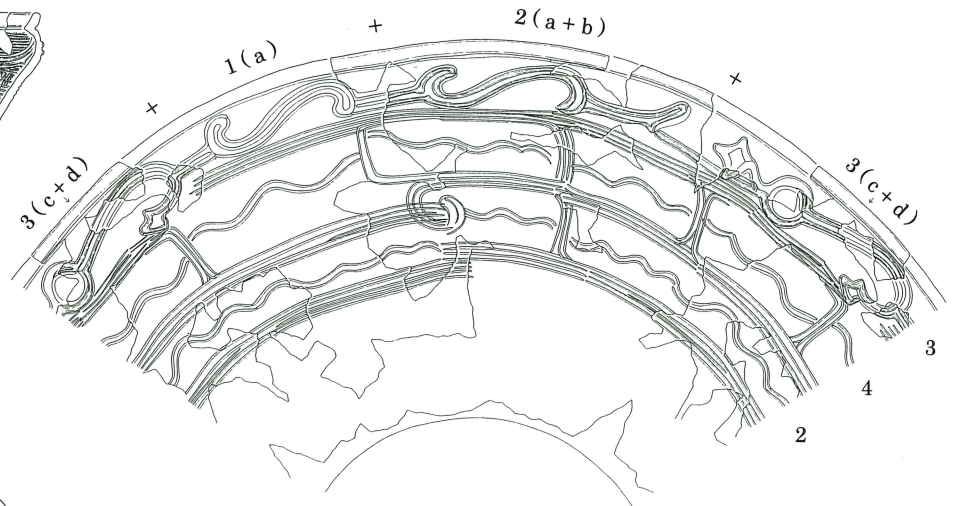
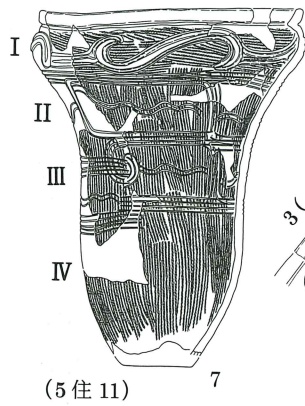
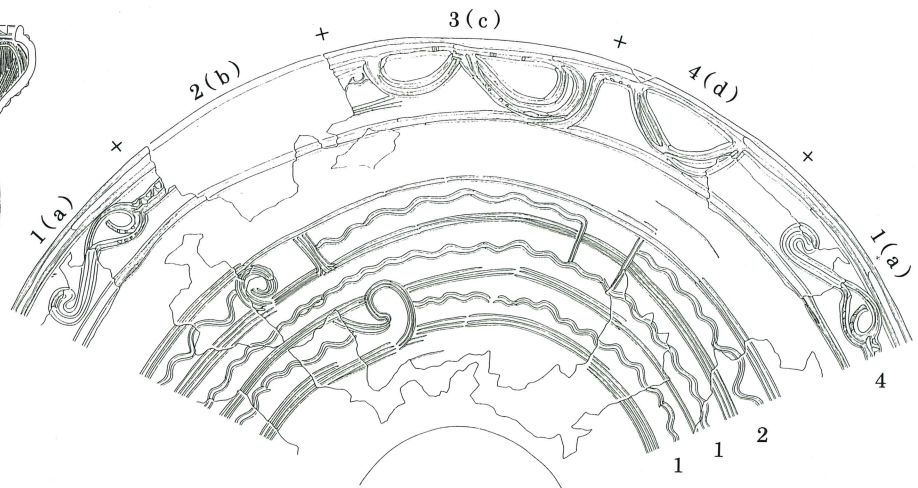
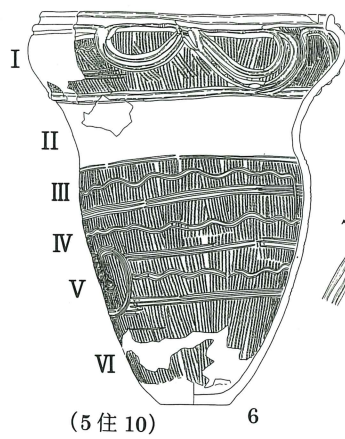
特に注目を引く土器は、1である。1は樽形の器形で、同上半部を文様帯とする。文様帯は3本を基本とする沈線で縦位の三角文を、交互に8単位に区画して、三角文が融合した菱形区画を1単位に配し、合計9単位の区画文を構成する。三角区画内は弧線文と三叉文が組み合うモチーフ（a）と、渦巻文と三叉文が組み合う（b）を交互に施文する。菱形区画内には両者が組み合った（a b）を施文しており、菱形区画を9番目の単位文とすると、展開図左から1（a）、2（b）、3（a）、4（b）、5（b'）、6（a'）、7（b'）、8（a'）、9（a b）の配列となる。ここで、4単位目と5単位目で文様の順番が入れ替わることが理解され、9単位目と同様に（a）と（b）の2組を1組として組み合わせを見ると、Ⅰ（a+b）、Ⅱ（a+b）、Ⅲ（b'+a'）、Ⅳ（b'+a'）、Ⅴ（a b）という5単位の組み合わせが考えられる。ⅠとⅡ、ⅢとⅣはほぼ同様なモチーフの繰り返しであることから、（A+A'）+（B+B'）+Cの構成となり、大きくはA+B+Cの3単位構成となる。単なる同様のモチーフの繰り返しと写るが、3単位構成で対称性を嫌うという勝坂式の構成原理（谷井1979）を堅持している。しかし、基本的には9単位に多単位化していること、菱形区画を基準にすると5単位構成であること等、加曽利E式の口縁部文様帯における単位構成と同様な構成を採る。この場合でも、ランダムな単位構成で

第1図 まま上遺跡出土土器の構造 (1)

$$(I+II)+(III+IV)+V=(A+A')+(B+B')+C$$



第2図 まま上遺跡出土土器の構造 (2)



はなく、円環的な単位循環を嫌い、対称性を崩す加曽利E式の構成原理(鈴木1983)が働いている。1が加曽利E I式と伴出した事実からしても、共時性は明らかであるが、文様等に勝坂式的な系統要素を強く持ち、背後に勝坂の構成原理を隠し持つが、器面が加曽利E的な構成原理で律されていることは注目に値する。まさに、勝坂式と加曽利E式の構成原理が融合した姿であることが理解される。

2は口縁部文様帯を持つキャリパー形深鉢の、1より古い時期の勝坂式土器で、口縁部三角区画文、胴部に楕円区画文を重畳するタイプである。文様帯は現存部分で4帯を数えるが、口縁部文様帯のI帯は突起から連なる変形三角区画と、その間の三角区画が組み合う4単位構成である。頸部文様帯のII帯はI帯の三角区画間下に4単位の楕円区画を配することで、文様のずれを演出するが、3・4と4・1間下の楕円区画が大きく、1・2、2・3間下の区画が小さくなっている。一見すると大きな楕円区画3単位の構成の様に写るが、小さな楕円区画を2単位配することで、4単位のバランスを保っている。さらに、胴部のIII帯では楕円区画は3単位しか配されないが、1・2間下の楕円区画間の余白に充填文を施文することで、4単位を繕っている。口縁部は不明の部分が多いが、胴部においては4単位構成を堅持しなければならないところに、3単位の意識が強く働いていることが看取される。安定した4単位構成は勝坂式的ではないが、単純な循環を繰り返さないところに、単なる割付時の「ゆらぎ」を超えた、対称性を崩す構成原理が窺える。

3は円筒形土器で、蛇行して垂下する2本の隆帯で文様帯を2分割し、その中間に逆「R」状の隆帯を施文する。縦位区画隆帯と逆「R」状隆帯の間に空間処理的な文様を充填しており、それぞれを単位文として数えると、 $(a+b+c+d) + (a'+b'+c'+d')$ の大きな2単位構成となる。それぞれの単位文が微妙に変化しており、同じものの繰り返しは当然のごとく避けられている。

4は1の構成と同様に、胴部上半に沈線文描出の文

様帯を持つもので、下半部を捺糸施文とする。文様帯全てのモチーフ構成は不明であるが、4単位構成であることは確かである。単位は対向のU字状文を3単位に施文し、1単位のみやや異なった文様を施文する様である。単位文間に施文する沈線渦巻文等の充填文は、全ての単位の中で異なっている。その意味からは、 $1(a) + 2(a') + 3(a'') + 4(b)$ の構成となり、4単位構成でも3+1の勝坂的な構成であるが、1単位のみを崩すという加曽利E的な構成原理も窺える。

5は器面全体を沈線文で装飾する土器であり、器形復元から6単位構成であることは確かであろう。しかし、残念ながらモチーフの構成が不明瞭で、単位構成の様相が把握されない。一括土器群の中に、6単位構成の土器が存在することは、重要な意義があろう。

第2図6～9は、基本形が加曽利E式系の土器群である。6は口縁部が強く内彎し、頸部が括れ、胴部の張る器形を呈し、加曽利E式系の標準的な器形と異なる。おそらく器形は櫛形文土器の影響を受けているものと思われ、実際に、口縁部文様帯には変形した櫛形文を施文している。6の文様帯構成は、Iの口縁部文様帯、IIの頸部無文帯、III～VIの胴部文様帯の合計6帯の文様帯で構成される。口縁部は、1単位が不明瞭であるが、4単位のモチーフを配するものと思われ、横S字状文の変形したモチーフ1(a)と2(b)の2単位、変形櫛歯文3(c)と4(d)の2単位構成が想定される。これは勝坂的な $(a+a') + (b+b')$ 構成と共通するが、単位文が全て異なる可能性があり、 $1(a) + 2(b) + 3(c) + 4(d)$ と理解した。また、不明の2(b)部分が櫛形文系のモチーフであるとする、3+1という更に勝坂式の構成に近づくが、第1図4と同様に加曽利E系的な解釈も可能である。胴部は、モチーフを施文する部位は3帯であるが、頸部と底部を入れると5帯で、加曽利E系土器としては破格の文様帯構成である。III～V帯には波状文と渦巻文を連結するモチーフを描くが、縦位区画線がクランク状に垂下したり、区画線が2文様帯にまたがって垂下するなど、明確な単位性は看取されない。モチーフ構成の由来は大木8a式の影響

を受けているものと思われ、モチーフは勝坂式、多段の横帯分帯も勝坂式の系譜を引いているものと判断される。Ⅲ帯は2下の縦位区画線とそれから派生してクラックに垂下する沈線と、4下の縦位区画線とそれから派生して渦巻文で完結する、2単位構成が考えられる。また、Ⅳ帯とⅤ帯に関しては、4下の縦位区画線や2下のR状渦巻文を波状文で連結するのみのモチーフ構成であり、単位性に乏しく、1単位と判断される。胴部に関しては、単位性が問題となるのではなく、その構成要素の系統性が重要となるのである。つまり、6は加曽利EⅠ式の形成で、櫛形文土器、勝坂式の横位多帯構成と単位構成、大木8a式のモチーフ構成が融合された、加曽利EⅠ式土器成立期の多系統性を極めて具現化する好例と言えるのである。

7は6より横帯構成が少ないが、同様な形成と系統性が指摘される。しかし、口縁部文様帯の在り方が異なる。口唇部が立ち、緩やかなキャリパー器形は加曽利EⅠ式初頭期の典型的な器形である。口縁部は1単位分が欠損して正確な部分は不明であるが、ここに単独の横S字状文を施文すると仮定すると、横S字状文とその変形モチーフを3単位に施文することになる。単独の1(a)、右側に角状の付加文の付いた2(a+b)、S字の一方が円形状となり、左側に不明瞭であるが星形状文の付く3(c+d)となる。勝坂式的な単位構成となるが、付加モチーフ部分を単位と認識すると5単位構成となり、加曽利E式の構成となる。やはり、勝坂的なものと加曽利E的な構成が融合している状況と認識される。胴部は推定部分が多くて単位構成を把握できないが、Ⅱ帯が4単位、Ⅲ帯が2単位構成となるものと推定される。

3は頸部が括れて無文の口縁部が開く勝坂系の器形で、口縁部に眼鏡状把手へ連なる隆帯1、2が2単位に垂下して、文様帯を2分割する。胴部は2帯に分帯しており、Ⅱは弧状沈線で把手を包囲する様に2分割するが、1+2間下の区画線は直線的に垂下し、単なる繰り返しの2分割ではないことを示している。また、Ⅲ帯は1、2の把手下に施文する縦位区画線で2単位に分割

するが、1下では把手の左側に、2下では把手の右側に施文しており、把手からのクラック状の垂下であり、尚且つ対称性を崩していることが理解される。2単位の構成は第1図3と共通し、文様帯の分帯構成やモチーフ構成は6、7と共通しており、やはり、勝坂式的なもの、加曽利E式的なもの、大木8a的なものの見事な融合であると認識される。

9は口縁部の屈曲の強いキャリパー形で、口縁部の様相は6に近い。渦を巻いて胴部に垂下する隆帯を2単位に垂下して、口縁部を2分割し、横S字状文を2単位ずつ施文する。一見すると、同じ構成の繰り返しの様であるが、渦巻文の巻く方向が逆になっており、対称性を嫌っている。口縁部に突起が付いていた様であるが、欠損しており不明瞭である。しかし、この突起に相違の明らかな変化が存在していた可能性は高い。把手を一つの単位とすると、 $1(a+b+b)+2(a'+b+b)$ となり、第1図3の構成と共通し、垂下隆帯で2分割し、単位モチーフに変化が見られないのは、全体的に8に共通し、また、8のⅢ帯に共通する特徴と言えよう。

(2) 単位構成の意味論的把握

以上、まます遺跡の土器群を、施文の単位性という点を中心に分析し、その系統性についても私見を述べてきた。これ等は解釈によって如何様にも判断されるという側面を持つが、1、4～9の土器群が明らかな共伴関係にあることから、敢えて共通点の抽出を試みたものである。実際に勝坂系の土器群と、加曽利E系の土器群が共伴関係にあり、随所に共通点が見られることは、上述してきた関係性の分析が、あながち無意味ではないことを物語るであろう。

単的に見ると、2単位、3単位、4単位、5単位、6単位、9単位構成が認識され、それぞれ勝坂的な単位構成の中に加曽利E的な単位構成が隠れていたり、加曽利E的な単位構成の中に勝坂的な構成原理が隠れていて、両者が融合していると言うよりも、むしろ表裏一体化している状況が観察された。また、勝坂的な

構成が強く見られる場合においても、1単位のみを違えて対称性を嫌うという、加曽利E的な原理が守られている状況が把握された。もともと、対称性を嫌う現象は、2に見られるように勝坂式の大原則であるが、単位数を増やしていく加曽利E式では、少なくとも1単位を崩すという構成へ変化していく。従って、まます上遺跡第5c号住居跡出土の土器群は、全体としてこの中間的な様相を兼ね備えており、まさに勝坂式終末期から加曽利EⅠ式成立期への移行期の状況を示していると評価される。また、文様要素の分析からも、勝坂式、大木8a式、加曽利E式が融合していることが

分析され、まさに、武蔵野台地の山間周縁部という、この地域における加曽利E式成立期の様相を時空的な側面で具現化しているものと評価されるのである。

従って、他の地域には、他の地域における土器群の組み合わせや、構成原理が働いていることが予想され、一様に土器群を理解し得ないのが現状であり、また、その関係性の分析こそが重要であることを認識させられるのである。確実に土器群が共伴関係にない場合でも、その平行関係の可能性を把握する手段として、関係性の分析こそが必要にして不可欠な条件であることを改めて指摘しておきたい。

2 加曽利EⅠ式成立期における土器群の再検討

前項における単位構成の検討から、まます上遺跡第5c号住居跡出土の一括土器群は、加曽利EⅠ式初頭段階の良好な土器群で、勝坂式終末及び大木8a式等との複雑な交渉関係を持っていることが浮き彫りにされてきた。ここでは、各地域の住居跡出土一括土器群の具体的な様相と比較検討することによって、また、新知見等を加えることによって、加曽利EⅠ式成立期の編年的な問題について、ささやかながら再検討を加えてみたいと思う。

加曽利EⅠ式成立期において問題となってきたことは、西部関東においては勝坂式終末土器群との関係、東部関東においては中峠式との関係、北関東においてはその成立母体と考えられる大木8a式との関係であった。まます上遺跡が埼玉県の武蔵野台地上に立地し、関東でも西部地区に含まれることから、とりわけ勝坂式との関係を主体として検討するが、当地域においても中峠式や大木8a式の影響が大きく反映していることは言を待たない。

また、西部地域においても勝坂式の終末と認識されてきた多喜窪タイプの土器群と、井戸尻Ⅱ式、Ⅲ式との関係が問題とされ、1982年の「縄文中期土器群の再編」(谷井1982)では、井戸尻Ⅱ式、多喜窪タイプの

ラインを中峠式段階として、加曽利EⅠ式成立以前と編年付けた。そして、井戸尻Ⅲ式は加曽利EⅠ式古段階に並行する土器群と解釈することによって、勝坂式の最終末と、加曽利EⅠ式の古段階との関係を清算してきた。

今日、事業団編年は大きな流れとしては大過ないものと考えているが、実際に想定した土器群に今日的な解釈を加味すると、周辺土器群とのすり合わせに若干の修正の必要が生じているものも存在する。ここでは、特に、多喜窪タイプの土器群との関係について、少々再検討を試みたい。なお、ここで、関連資料として掲載した土器群は縮尺を全て10分の1に統一してある。拓本に関しては10分の1と6分の1の両者がある。また、説明の都合上、まます上遺跡出土土器の番号は考察図版用に振り替えてある。

(1) まます上遺跡の様相

周辺地域の土器群との検討を行う前に、まず、まます上遺跡の土器群を復習しておきたい。まます上遺跡で、勝坂式終末から加曽利EⅠ式初頭期の土器群を出土する住居跡は、第2号住居跡(第3図1~8)と第5c号住居跡(第3図1~22)である。